園芸別科花組レポート

人生花色・花組の色

千葉大学園芸別科　花卉専攻2年
菅　原　弘　行

現在、私は園芸別科花卉専攻（通称花組）に所属している。花組という名を聞くと可愛いイメージがあるが、決して生易しいものではない。渡辺均先生の指導のもと、花のプロフェッショナルを目指すべく、植物の初歩的な知識から高度な栽培技術までを幅広く勉強する。

入学して間もない頃に、先生が私たちに言った言葉がある。「園芸別科を卒業する2年間の間で、君たちには花のプロフェッショナルを目指してもらいたい。」当時の私には、この言葉にまるで興味がなかった。

私は農業高校を卒業して、千葉大学園芸学部園芸別科に入学。実家がバラとキクを栽培している切花農家の長男に生まれた私には、生まれた時から花があった。幼い頃は、多少なりとも花に興味をもっていた。しかし、自分が成長するにつれて、その感情もしだいに薄れていった。それは自分の将来が決まっていて、決められたレールの上から逃げたいという感情があったからではないだろうか。今思えば、その逃げたいという感情がきっかけで地元を離れ、そして花組に巡り会えたのかもしれない。

花組に入って最初にやらなければいけない仕事は灌水である。松戸キャンパスには、ビニールハウスが2棟、熱帯植物やラン類を管理する温室が1棟、計3棟の花組専用ハウスがある。これらのハウスの植物を花組全員がローテーションを組み、当番制で管理する。切花農家に育った私は鉢花に触れたことがなく、灌水などもってのほかであった。その灌水で、自分にとって一生後悔するような出来事が起こった。

夏のような暑さになった春の日、自分が灌水当番というのを忘れてしまい、ハウス内の植物をほとんど枯らしてしまった。その時、自分の無力さと、植物に対する想いの無さを激しく痛感した。そして植物も人間と同じく、生きていることを知った。その日を境に、自分が興味を持たなかった植物を意識して観察するようになり、自分の意思で植物を知ろうと思った。そこで初めて真面目に勉強しようと思ったのが、花葉会主催花産業必修1000属検定だ。1000属検定を勉強していくと、植物の広大な世界を目の当たりにすることとなる。以前は、実家で栽培しているバラとキク、高校で栽培したシクラメンやベゴニアぐらいしか植物の名前は知らなかった。もちろん、植物の学名など知るはずもなかった。そんな植物知らずの私だったが、最近はようやく植物の世界のスタートラインが見えてきた気がする。

花組の最大のイベントといえば、戸定祭での花販売である。11月に行われる戸定祭に向けて花組全体で協力し合い、先生や苗生産部の技官の皆さんのアドバイスを得て植物を栽培し、それを販売する。自分達の実力が評価される重大なイベントでもある。戸定祭が終わると、2年生には必修科目である修了論文がある。私はバラを研究テーマにしているのだが、まさに悪戦苦闘。2年間という短い期間での研究なので、失敗すると後戻りはできない。皆、必死になって取り組んでいる。

花組の2年間はあっという間で、先生が私たちに言った「花のプロフェッショナル」になれるかどうかはまだ不安である。しかしながら、花組で過した2年間は一生の宝物だと思う。花を自分から好きになることができ、そして大切な仲間ができた。花組で過ごす2年間はまさに、人生花色・花組の色である。

‘さくらさくら’と花組